
永久の覇者 カイン

亜紀内 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の覇者 カイン

【Nコード】

N9626Y

【作者名】

亜紀内 司

【あらすじ】

『私の全てを賭けにして——— この世界を守ると誓おう』

遙か昔、人魚がまだ生きていた頃——— 魔王、という存在は自ら命を絶った。

正確に言えば2000年後の未来に転生した。自らの魔力と記憶を封じて。これはその魔王が転生した後、カインという超 傍若無人な青年になり、成長していく（していくか…？）お話です*

コメディを多めにしたいですが、シリアスもちろんありますb

《こっから私的な話になりますw》

個人的には魔王&勇者&賢者の組み合わせって凄い愛していたりww
なので勇者と賢者もしくしたら絶対登場させたいでs()

あと魔性の女…じゃなかった魔女!!

魔女がいなきゃっ()

吸血鬼もいいですね………幼女ならなおs()殴

望みは全て——（前書き）

魔王……魔王って響き素敵だと思いませんk（殴

望みは全て――

それはいつから始まっただろう？

望んでいなかったそれは、彼の知らない間に起こった。

信頼していた者に裏切られる時の胸の痛み、人を殺す時のあの罪悪感――。

全て全て全て……！！！！！！

あれの所為だと言うのに――！！！！

ああ……早くこの世界から消えてしまいたい。

そうすれば、そうすればきつと――

この胸の中にあるものの正体が分かる気がする。

今まで自らを転生させる度、前世の記憶を持たせようかどうか迷い、結局残しておいた。

——しかし……

もしもその記憶全てを私自身の中に封印すれば、もしかしたら未来は変わるのでは……？

——ああ、親愛なる最愛の友よ……君に託そう。

私の命を。

私の全てを賭けにして——

この世界を守ると誓おう。

望みは全て——（後書き）

中途半端な終わり方で申し訳ない……

評価や感想など求む！です*と言ってもまだ全く進んでいませんが
…

青年と黒猫 ？（前書き）

いきなり傭兵たちが逃げている場面から始まります。

多分、何故逃げたかの詳細は次の話で出すかと…。

青年と黒猫？

「ただの傭兵である貴様等を助ける義理などないだろう？」

我先に、と逃げていく兵の中、救護室で怪我の治療をしていた傭兵——サルジアが助けを求めた時、彼の指揮官は冷たくそう言い放った。

その光景を横目で見ながら、速やかにその場から退却していく同士たち。

サルジアは彼等に視線を向けるも、誰一人として助けようとしな
い。

「……………」

彼が絶望した時だった。

「おいおい、我等が指揮官様は冷てえなあ…………？」

そう言いながら、逃げていく傭兵を押しつけ、彼の前に現われたのは…

「カイン……………」

サルジアは目の前に現われた自らの友人を呆けた顔で見つめた。

「あの指揮官様はどうかの没落した貴族出のご立派な奴らしいから、

そんな事が言えるだけさ」

わざとらしく大きな声でそう言って、パチリ、とウィンクする。

……このタイミングでは絶対言えないが、上手いとは思えなかった。

「というかお前、いつの間に左腕怪我してたんだよ」

そう言いながら包帯でかなりきつく巻かれた上に血が滲み出ている彼の腕を、ことも何気に叩くカイン。

「っ——！！ってえよっ！！！！！！」

苦笑いして軽口を叩く彼だが、尋常でない痛みらしく、大量の汗が噴き出していた。

「あーこりゃあかなりの重症だな」

はははは、と笑うカインを恨めしそうにサルジアは睨んだ。

「お前なあ……」

「それより、サルジア」

急に真顔になる。

「助かりたい、よな？」

何故そんな分かりきった質問をするのか、彼は聞かなかった。
カインは意味の無いことはしない。

それを知っていたからだ。

「もちろん」

即答した。

それを聞くと彼の表情がいたずらっ子の少年のようなものになる。

彼は辺りを見渡し自分達しかいないことを確認すると急に救護室の棚に視線を向けた。

「……もういいぞ、出て来い、ノアール」

は？誰だそれ

サルジアが言うよりも先に手入れの行き届いた美しい毛並みを持つ黒猫が彼等の前に飛び出した。

『やっと私の出番ですね、カイン様』

猫は流暢な人の言葉でそう言うのと、ふとサルジアに視線を向ける。

『……その方は？』

「俺の友人だ。……絶対に裏切らない、な」

一瞬彼の瞳に影が差した気がしたが、すぐまたいつもの生意気な光を宿す。

『——分かりました。カイン様が言うなら信じましょう』

黒猫はそういつと何か呟いた。

その途端、彼等を囲うように青白い光を放った魔方陣が現われた。

「?!」

サルジアは呆然とする。

魔術方面で雇われた傭兵である彼には分かる。

——これはかなり難度が高い、高等魔術の魔方陣だということを。

こんな猫が?!

「ほら、サルジア。肩貸すぞ」

ニツ、と笑いながら魔方陣の中央に立つカイン。
今はその笑顔が、とても心強く思える。

『空間を捻じ曲げて移動いたしますので、たまに酔う方もいらっしゃるやいます。お気をつけ下さい』

誰にともなくそう言った黒猫は視線を自分よりも遥か上にあるカインの顔に向ける。

「了解、了解。魔術とかよく分かんねえけど、よろしく頼むわ」

彼がそう言った途端、その場の景色が、崩れた。

青年と黒猫 ？（後書き）

いきなりな始まり方でスミマセン……

次の話でいろいろ状況理解できるようにする…予定です（（

青年と黒猫 ？（前書き）

ちよつとした回想&ちよつとした展開な3話目*

ちよつとずつ読んでくださる方が増えればと思ってます ミ（殴

青年と黒猫？

この世界の東に位置するアノテマリア大陸。

その大陸の最南端にある小国ミラリスと、その隣の小国グレイシーは昔から相容れなかった。

隣国なので形だけは同盟を組んでいるが、お互い目を光らせ、いつボロを出すかずっと様子を伺っている。そしてそれを理由に戦争を起こし、さつさと自らの国に従わせようという魂胆だ。

そして先月、ついにグレイシーの『裏切り』と取れる行動をミラリスが目敏く嗅ぎつけた。

それはグレイシーが、大国スノーランとひそかに同盟を組もうとしている、という物だった。

元々、相容れない両国が同盟を組んだ最大の理由がスノーランの政策に抵抗する為だ。

しかしグレイシーの王はこれ以上スノーランに抵抗すれば、自らの国が危ないと悟り、スノーランに同盟の話を持ちかけた。

それを嗅ぎつけたミラリスの王は出兵をし、グレイシーとの戦争が始まった――。

しかし、ミラリスの王はある誤算をしていた。

それは、彼が戦争を始めたとき、もう既にグレイシーはスノーロー

ランと同盟を組んでいた、ということだ。

つまり、兵や経済面など全てにおいて、ミラリスは劣っていた。

しかもスノーランの魔術部隊の中には有能な幻術師がいたらしく、ミラリスの兵は混乱に陥った。

理由は簡単。

バイコン フェニックス ユニコン
二角獣や不死鳥、一角獣……しまいにはワイバーンなど、幻の生物と謳われるものを戦場に持ち込むスノーランに恐怖を覚えられないものはいないだろう。

——幻術とは露知らず。

恐怖という名の思いが彼等ミラリスの兵の中に生まれた途端、ミラリスの兵の戦意は喪失した。

そして同時に、我先に、と敵に背を向け戦場からの逃走を図ったのだ。

） ） ） ） ） ） ） ） ） ） ） ）
） ） ） ） ） ） ） ） ） ） ） ）

「……にしてもこれからどうすつか」

先程まで戦場で血を浴びていた者とは思えない緊張感のないカインの発言にサルジアは軽いため息をついた。

「いや……どうすつかって……。とりあえず、陛下に会いに行こう」

「……そうだな。どうせ目の前に城はあるし」

二人は同時に同じ方向に視線をめぐらせる。

黒猫、ノアールのおかげで戦場を切り抜けて来た彼等が空間移動で着いた先は、ミラリスの城の真ん前だった。

『……カイン様はこの国の王がお嫌いでいらっしやるのですね』

ノアールはそう呟くと『カイン様が望むのであれば今すぐ消しますが……』と恐ろしいことを言い始めた。

「いやいやいやいや！ダメだろ！！……あ、いや……ダメ、です。うん。一応であつてもこの国の……国王……」

ミラリスが急に敬語になったのはノアールにギロリと睨まれたからだ。

なにこの猫、すげえ怖え……。殺気が……さっきからずっと背中に……。

そんな事をサルジアが思っていると急にカインが真面目な顔になり、呟き始めた。

「あいにく、戦争に殆どの兵が参戦してたから、この城の警備は今とても薄い。侵入して王を脅して、無理矢理報酬を要求すんなら今のうち……」

「いや、ちゃんとあつた事を全部話してから報酬貰おうぜ。平和的

に解決……」

「ああ……でもそうか……。あの糞爺くそやじいにはいつもなんかやたら強そうな姉ちゃんがいるんだっけ……」

「ちょ、仮にも一国の王を糞爺呼ばわりってな……」

「いや……でも相手は女……。ちよつと強引でも突破は出来ないこともない……」

「お前、如何わしい事考えてねえよな？」

『カイン様に限って、それはありません』

ノアールに間髪入れず突っ込まれた。
相変わらず友人は考えに没頭するあまりサルジアの言葉自体耳に入っていないかったようだが。

難しそうな顔をしながら、言っていることは無茶苦茶だった。

しばらくサルジアがノアールの殺気のこもった視線に耐えていると急にカインが声を張り上げた。

「……よし、決めたっ……！……ってあれ？どうしたサルジア。なんか引き攣くわってるぞ」

思考の海に浸っていたカインが現実に戻ってきたらしい。

「——いや……別に……」

実際は、ノアールに傷口を噛まれ、痛みに悶絶していたのだが、それを言ったら殺されるだろう……猫に。

「……そうか。まあいいや」

（よくねえっ！）

心中で突っ込みつつ、ノアールの目が光っている今は絶対に口を滑らせたりしない事を自らの心に固く誓う。

「じゃあとりあえず、侵入しますかね、城に」

「は、本気で侵入する気だったのか?!」

確かに彼ならやりかねない事だが……。

「いや、だって門番がいないんじゃ、取り次ぐとか無理だろ」

残念なことに正論だった。

『流石です、カイン様。一生ついていきます』

ノアールがとても嬉しそうに言った。

……結局この猫はなんなんだ……。

「はぁ……まあしょうがないな……。明日からの生活費とか困ってるし」

苦笑しながら、自らの妹と弟を思い出す。

「じゃっ、そーゆーことで」

カインは目をららんと輝かせながら、城への侵入を開始した。

青年と黒猫 ？（後書き）

ggdggdモード突入っ！ですね＊

ちよこつとこの場を借りてこの小説をお気に入りして下さった方にお礼を（見てくれているでしょうか）。本当に、ありがとうございます＊どなたがお気に入りしてくれたのか分からないのが残念ですが……。はじめて小説をお気に入りして下さった方がいたので嬉しいですっ！！

では、では、よろしければ次の4話もよろしく願いします＊

侵入者と国王 ? (前書き)

侵入者は大体誰の事か分かるかと… (前の3話を読んでいれば) *

侵入者と国王？

小国ミラリスの城、カナレ城。

唯一の城に入る為の門には跳ね橋があり、周りには水が張られた堀がある。

警備だけは厳重な国王は、城の作りも出来るだけ侵入者が容易に突破できないようにしてあった。

……… あったのだが……。

「よお、糞^{くそ}じじ……じゃなかった、国王陛下」

「……………」

ミラリスの国王、フレディ・ミラリス・サラリユーナは、城の中への侵入をいとも軽々とやってのけた目の前の青年に啞然とした。

「お前っ！国王陛下になんてことをっ……！陛下っ！失礼しましたっ！」

その隣で腕を怪我しているのにも関わらず毛並みが綺麗な黒猫を抱えている青年はそう言って、真っ青になっていた。

しかし、そんな会話は彼の耳に届かない。

「……君、名前は」

フレディはやっとのことで声を絞り出す。

警備だけは厳重にやってきたはずなのに、こんな若者に軽々と侵入を許してしまうとは……。

そう思いながら。

すると青年は嬉しそうに「俺の名は、カインってんだ」と言った。

——カイン……？ と言えば城の騎士の間でそんな名が噂になっていた気が……。

どんな噂だったかと自らの記憶を探ってみるも、思い出せない。もともと記憶力には自信がなかった。無理もないか、と自分で勝手に諦める。

「で、隣にいんのは友人のサルジアに、黒猫のノアール」

カインと名乗った青年は順にその場にいた者の紹介をした。

「俺たちはアンタ……じゃなかった……国王様に報酬を貰いに来たんだ。傭兵として働いた分の」

さっきまでの好意的な笑みとは程遠い、黒い笑みを見せる。

傭兵として。

その言葉で、国王は目の前のカインと言う青年の噂……これまでに起こしてきた事を全て思い出した。

金がないから国王に下働きとしてでもいいから雇ってくれと言いたいと、この城の門番に言って断られた瞬間、門番を殴って一瞬で気絶させて大騒ぎになったとか、城下の見回りにあたっていた警備

員を力だめし、などと言って、いきなり真剣で襲い掛かったとか、十数人の山賊に襲われた時、瞬殺し、彼等が持っていた金目の物全てを盗っていったとか……………。

拳句「何故そんな馬鹿なことをするんだ！」とフレディ自らが、使者を彼の元に向かわせ、聞きに行かせた所、

「いや、だって金がなきゃ生きてけねえし、傭兵として雇ってももらえねえし」

という、少々ふてくされた青年のどうでもいい私情を聞かされ、延々と金について語っていたと言う。

しかし、彼が金に執着する本当の理由は、実際のところ自分の為でなく、遊びに来る村の子供たちの為に用意する砂糖菓子を買う為らしい。

彼はそんな事をわざわざ使者に言わなかったようだが、丁度、そのとき村の子供たちが彼の家に遊びに来て、使者がなにも聞いていないのに勝手にべらべら喋ってくれたらしい。

そんな変わり者の青年を特別に傭兵として雇うことにしたのが自分自身だったと言うことにフレディは頭痛を感じる。

もしここで断ったら何かやらかすのは目に見えている。

「……………分かった、要求を吞もう。その代わり、一つ聞かせてほしい」

それは、代わりと言うにはあまりにも素朴な質問だったが、国王にとっては重要な事だった。

「何故、警備に見つからずここまで来れた？」

それを聞くとカインは、ニヤリと笑う。

「その有能な黒猫が、入れてくれたのさ」

彼がそういうとずっと黙っていたサルジアという青年が抱いていた黒猫が嬉しそうに『ニャー』と鳴いた。

「……………」

国王はあまりにも信じがたい彼の発言にしばらく呆然とせずにはいられなかった。

侵入者と国王 ？（後書き）

黒猫のノアールはメスでs（）

いや、正確には……（この先ある意味ネタバレなので書けませんw）

そつえば3話に出てきたカイン曰く「強そうな姉ちゃん」はまだ出てきてませんね（）

侵入者と国王 ？（前書き）

4話の続きなので、いきなり会話から始まります；；

一気に書いてしまえば、こんな前編 & a m p ; 後編みたいにしないでいいのですが……

読みにくくて申し訳ないです。

侵入者と国王？

「で、糞じじ……国王、そろそろ俺の報酬をくれないか。なにダッセエ面してんだよ」

しばらく国王がショックから立ち直るのを待っていたカインだが、完全に立ち直るのを待っている程、彼にも時間がない。いつ彼の護衛が来るか分からないのだ。

「……………ああ……………そうだったな……………。14万キルでいいか？」

まだ猫に警備を突破されてしまったショックから完璧には立ち直れないらしく声に生気がない。

現に玉座に座ってカインたちの方を向いてはいるものの、目の焦点が合っていない。

「は？14って……………。国王様さあ、冗談も大概にしるよ？戦場で大活躍して生き残ってきた英雄に14って……………俺の存在をなんだと思っっているんだ」

カインがやれやれ、と肩をすくめて見せる。

（始まった……………。カインの“口八丁手八丁”……………。世界一世渡り上手な男……………）

カインの演技力に少々呆れつつも尊敬してしまう自分は、やはり彼の实力は認めているようだ。

「14万キルでは足りない……………？では30万キルでどうだ？」

カインの『14万キルでは足りない』という発言に少々驚いた国王だったが、何か起こされてはたまらないので、金額を上げる。

「うーん……………」

カインがわざとらしく首を傾げながら唸る。

「……では、そなたはいくらがいいんだ？希望は絶対に叶えてやる」
フレディが投げやりにカインにそう問う。

——何秒後かに、彼は自分の発言に後悔する事になる。

国王の『希望は絶対に叶えてやる』という発言を聞いた途端、カインの瞳がキラリと光った……………気がした。

（…………俺、疲れてるのか……………？人間の目があんな分かりやすく光る訳、ないだろう……………）

ノアールを片手で抱えながら、もう片方の手で自らの目をこするサルジア。

「なあ、国王。一つ質問なんだけど」

カインがおどけた口調でそう切り出す。

「なんだ？」

「……報酬ってさ、物とかも貰えんのか…………？」

「まあ、出来ないことはないな、そなたが望むなら。もう叶えてやると言ってしまったしな……」

それを聞くと、カインの目からんらんと輝く。

「じゃあ俺に土地をくれ！！！！」

「……………は？」

国王とサルジアの気の抜けた声が重なった。

「いや、だから、土地……………」

カインがそう言いかけた時、いきなり頭上から、黒い何かが降ってきた。

「ちつ……………もう来たのかよっつ！！！！！」

カインが舌打ちする。

「……………侵入者は排除してくれる」

女性の声と思われるものがどこからともなくこの高い天井に響く。

「は……………？は……………？！」

サルジアは自らの足元に落ちた黒いものと今の状況を把握できず、呆然とその場に立ち尽くす。

「……………くない……………？」

『この鈍間ツマっ！！走りなさいっ！！当たりたくないでしょう？！』

自らの腕の中で叫ぶ猫の流暢な言葉で我に返り、必死に走り出す。

殺される——。

本능がそう告げていた。

「サルジアー！こつちだっ！！！！」

脱出経路を窓に決めたカインが手招きしている。

「……………」

無言で頷いて、何の抵抗もなしに窓へと突進する。

少し大袈裟ではと思えるほどのガラスの割れる音と共に、空中へと体が放り出され――

（あれ……？こつからどうするんだ……？）

サルジアが焦る。

地上25メートルの場所に王の謁見の間があるため、かなりの高さがある訳で――

（え……これ自殺行為じゃね？！ちょ……カインどうすんだっ！！）

恐怖で自らの顔が引き攣るのを感じながら、友人の方を見る。

「おーい！糞じじ……国王！！報酬の件、よろしく頼むな――！！」

「このタイミングでそっちの心配がよっ！おい！！」

恐怖で出なかった声が、彼のあまりにも空気を読まない発言に反応し、勢いよく発せられる。

『流石、カイン様。この状況下に置かれても、他のことの心配をなさるなんてっ……!』

ガラスに突撃した時、自分からサルジアの腕から出たノアールが感動したように器用に頬を押さえた。——猫なのに。

「だよな、流石俺だろ?……ってことでノアール空間移動、よろしく頼むわ」

からからと笑ったカインが急に真面目な顔になる。

『もちろんです』

ノアールがそう言うと同時に落下速度が急激に落ち、空中に青白い光を放った魔方阵が浮き上がる。

『とりあえずカイン様の故郷に転送しますわ』

「ああ……。こっぴどく叱られるだろうなあ」

一瞬カインが遠い目をしたのをサルジアは見逃さなかった。

『では、行きます』

目の前の景色が、一瞬で真っ黒に塗りつぶされた。

侵入者と国王　？（後書き）

そろそろノアールの正体とか出てきてもいいなあ…と自分で思っていたり…。

この場を借りて、この小説をお気に入りにして下さった方々にお礼を。

まだまだ未熟すぎる表現力の自分ですが、よろしければこれからもよろしく願います（´、＃）アドバイスなども遠慮などせず、どんどん言ってやってください（´）

少しでも自分の小説が読んでもくれる方に楽しく読んでいただければ幸いです／＼／＼／＼／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9626y/>

永久の覇者 カイン

2011年12月2日19時25分発行